

第四部 歌に誤りやすい語法

- ◎若山牧水集・くろ土
- ◎赤光・あらたま
- ◎川のほとり
- ◎林泉集・しがらみ
- ◎吉井勇集
- ◎前田夕暮集・原生林
- ◎土岐哀果集・空を仰ぐ
- ◎寂光
- ◎金子薫園全集

等を擧ぐべきであらう。尙、これ等諸家の集の中から分類編輯した

◎現代歌選

も初學者に簡便な携帶書である。

若山 牧水  
 齋藤 茂吉  
 古泉 千櫻  
 中村 憲吉  
 吉井 勇  
 前田 夕暮  
 土岐 善麿  
 吉植 庄亮  
 金子 薫園  
 若山 牧水園編

近頃の若い人々の詠む歌には、語法上の誤が非常に多い。注意して見ると大抵一首に一箇所位の誤があり、ひどいものになると何のことかわからないほど誤つてゐるものもある。たとへば、本來活用しない詞を無理に活かしたり、長短もとより具はつた詞を自分勝手に伸縮したり、その無謀さお話にならぬやうなのが多い。

語法の誤りやすいものだけを取つて説明するだけでは、ほんたうではないのである。語法全體に互つて詳しい説明をせねば、初心者には十分でないから、出来るならさうしたいのであるが、それはこの書の一項目としては仕事が大きすぎるし、又、一般の語法については、各種の文典も出版されてゐて、その方で十分に研究も出来ると思ふから、こゝにはその中でも、作歌の上に最も關係深く、且つ誤りやすいものだけを特に擧げて説明しようと思ふのである。故に普通文典に詳しいところはこゝでは略し、略してあるところは詳しくして、誤りやすい道のしるべを、一層明かに示すようにしたい。讀者もどうかそのつもりで熟讀し、一語なりとも誤用のないように期していただきたいのである。

## 一、動詞

### (一) 自他の誤

初心者の歌には、自動詞と他動詞を誤用した例が甚だ多い。自動詞とはそのもの自身ではたらくのを現はす詞、他動詞とは他の事物を處置するのを現はす詞であるが、それを混同して用ゐた例が非常に目につくのである。一二の例を擧げると、

庭の雪つもりたるらしこぼるる梢折る音は夜すがら閨にひびくも

里川の水あふれきて流れ込こむむわが早苗田に鯉泳ぎをり

などがそれである。この二首の歌を、このまゝで解釋すると、前の歌は誰かど働きかけて「梢を折る」ことになり、後の歌はやはり誰かど働きかけて「水を流れ込ます」ことになるのである。しかも實際は兩方とも自らなるはたらきによつて「梢が折れ」「水が流れ込んだ」のであるから、どうしてもこれは折る、込む等の自動詞を用ゐて、

庭の雪つもりたるらし枝折る音は夜すがら閨にひびくも

里川の水あふれきて流れ込むわが早苗田に鯉泳ぎをり

とせねばならぬのである。

ところでこゝに、一言注意しなければならぬことがある。それは、自動詞とはそのもの自身ではたらくのを現はす詞なら、自分のすることはみな自動詞を用ゐるかといふことであるが、これはあながちさうとのみは限らない。例へば、

垂れ込み<sup>▲</sup>て幾日経しまに裏畑の茄子はみなながら實さなりにけり  
といふ歌を作つた人があつたとすると、これは考へ方が間違つてゐる。この場合には如何に自分で働くとはいへ、おのづからではなく「われとわが身を家に籠らせ」と解釋すべきで、やはり「垂れ込めて」と他動詞を用ゐるのが正しいのである。

(2) 上一段活の誤

かりそめのあそびさいへど弓を射り<sup>▲</sup>猛くあそびむ益良夫われは

といふ歌を作つた人があつたとする、これは俗用語の習慣から活用を誤つたものである。「射」は元來上一段活用で、

射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup> 射<sup>い</sup>

などと活<sup>はたら</sup>くが、射<sup>り</sup>とは活用しない。この種の詞には着<sup>を</sup>きり、乾<sup>を</sup>をひり、などの如く誤用させることがよくあるから、注意しなければならぬ。

(3) 下一段活の誤

下一段活用の詞は、蹴<sup>○</sup>の一語だけだから、一度文典に目を通した者は、誤る譯はないのだが、こ

れも俗用語の習慣から、

ちかひたる人待つならむ少女子は道のかたへに砂利を蹴<sup>り</sup>をり

といふ誤用を見た。これは文章語に於ては、

蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup> 蹴<sup>け</sup>

とより活かないから、勿論誤である。

(4) 終止段・連體段の誤

動詞の下へ體言が来る場合は、常に連體段即ち第四活用から続けねばならぬのが文典の法則である。ところが之を誤つて、終止段即ち第三活用から續けた題を見ることが甚だ多い。

水清く流る<sup>▲</sup>小川の川底の石はひねもすうごきつつ見ゆ

故郷に父さ語ればうれしくてれむくもあらず夜更く<sup>▲</sup>早しも

などがその例であるが、これは陥りやすい誤だから、よく氣をつけねばならぬ。正しくいへば、

水清く流る<sup>○</sup>る川の川底の石はひねもすうごきつつ見ゆ

故郷に父さ語ればうれしくてれむくもあらず夜更くる<sup>○</sup>はやし

とすべく、第三活用は終止の意を現はし、第四活用は次の體言へ連る意を現はすといふ文典の法則

を、よく心得て置くべきである。

### (5) 將然段・已然段の誤

將然段といふのは、事のいまだ定まらずして將に然らむとする意を現はす詞、已然段といふのは事の已に定つた意を現はす詞である。そして前者は第一活用がその役をなし、後者は第五活用がその役をなすのであるが、これも何でもないやうで誤る人が多い。たとへば、

花咲けば<sup>▲</sup>またも来て見む故郷の枯草山は風ふくばかり

などがその誤の例であつて、これを文典どほりに解したのでは、その意味が通じない。このまゝでは「花が咲いてゐるから又も来て見よう。故郷の枯草山は風がふくのみである」といふ意で、何のこともか一向ことわりがとほらなくなる。これは作者の意では、多分「故郷の枯草山は、たゞ風がふくばかりである。春にでもなつて花が咲いたなら又も来て見よう」といふのであらうが、それなら第一活用の將然段で、

花咲かば<sup>○</sup>又も来て見む故郷の枯草山は風ふくばかり

とせねばならぬのである。この誤はこの詞のみならず、一體の動詞に多いから、よく注意する必要がある。

## 二、形容詞

### (一)「しく活」の誤

形容詞の中でよく誤るのは、この「しく活」の用法である。「しく活」といふのは

悪 しく しく し しき しけれ

と活用する種類のことで、この五つの變化さへ心得て置けば、さほどむづかしいものではない。然るにどう心得ちがひをしたものか初心者の歌には、

故郷の河原の草ぞなつかしし<sup>○</sup>花にも葉にもほふ思ひ出

わが山の杉の大樹を裂きし<sup>○</sup>ふ天の鳴神われおそろし<sup>▲</sup>

などと用ゐたのを折々見る。これは前の活用を見ればわかるが、言ふまでもなく活用の誤で、この「しく活」はししと語尾の活らくことは決してないのである。正しく言ふなら、

故郷の河原の草ぞなつかしき<sup>○</sup>花にも葉にもほふ思ひ出

わが山の杉の大樹を裂きしき<sup>○</sup>ふ天の鳴神われおそろし<sup>○</sup>

とすべきで、少しく注意すれば、こんな誤には陥らずにすむ筈である。

ところで、ちよつと説明を要するのは、なつかしもおそろしも共に「しく活」であるのに、一方は

第四活用のしきで結び、一方は第三活用のしで結んだことである。が、これは普通文典の係結の條を讀んだことのある人ならずぐわかる。つまり、前の歌はなつかしの前にぞといふ係があるから、係結の法に従つて第四活用で結び、後の歌は上に係の詞がないから、第三活用即ち終止段で結んだのである。この係結に就いては、後段に項を改めて説くから、その條をも参照するがよい。

「しく活」の誤用は、これらの外にもまだ多くの例を見る。殊に、久、惜、嬉などを、久し、惜し、嬉しなどと活かした誤は常に多く見るところで、數へるに遑ないほどである。これらの誤に陥らぬよう、注意すべきである。

(2)「き」「く」の誤

よく幾つかの形容詞が重つて、一語を形容する場合がある。こんな場合には最終の一形容詞のみに第四活用を用ひ、他は必ず第二活用を用ひなければならぬ。所がこれも誤り覚えやすいと見えて

ひさ本の赤き小き花だにも秋さしいへば悲しきものを

などといふ用例をよく見る。これも正しくいへば誤であつて、假に之を文典どほりに解釋すれば、「赤い花と、小さい花と」といふ意味になる。が、上に「ひと本の」とことわつてあるからには、實際は「赤く小さき一本の花」で、

ひさ本の赤く小き花だにも秋さしいへば悲しきものを

とすべきである。尤も、特殊な場合には語氣などの關係から、わざときを重ねてゆくこともあり、又それを誤用だと決定しかねる場合もないではない。けれどもそれは餘程微妙な言葉の文を持つ名歌の場合で、初心者にはまづ覺束ないと見る方が安全である。殊に「貴き賤しき人」といふ例を設けて見ると、この誤は明瞭になつてくる。この場合には勿論「貴き人と賤しき人」の謂ひで、「貴く賤しき人」の意味ではない。してみれば「赤き小き花」も明かに誤なのである。

又これとは反對に、幾つかの形容詞が、みな第四活用でなければならぬ場合がある。たとへば「白き青きさまざまの色」などといふ場合であるが、これを又誤つて、

白く赤き花さきみちてわが庭の花畑はいまさかりなりけり

などと用いた例を見ることがある。これは前の用法を逆に誤つたのであつて、これでは「白くて赤い花が咲きみちて」といふ意味になり、事理が通じない。言ふまでもなくこれは、

白き赤き花さきみちてわが庭の花畑はいまさかりなりけり

として、はじめて正しくなるのである。

三、助動詞

(一)「らむ」の誤

「らむ」といふ助動詞の意味は一體どうかといふと、これは「現在もしくは實在の動作の、目に見えぬか又はその然る原因を想像するもので、現在想像の助動詞である。だからこの詞を用ゐる條件としては、先づその想像することが現在のことでなくてはならない。

憶良らは今はまからむ子泣くらむ。その子の母も吾をまつらむぞ——萬葉集——

などが最もいゝ例で、こゝでは「子の泣く」といふことも「その子の母も自分を待つ」といふことも、みな現在の想像である。ところが初心の人は之を誤つて未來の意に用ゐ、

わが庭に植ゑし梅の木來む春はにほひもしるく花や咲くらむ

と用ゐた例があるが、これは「來む春」といふ未來に咲く花を想像して、らむで現はしたのだから、勿論誤といはねばならぬ。

ところが初心者が心得がたからうと思ふのは、前に挙げた「憶良らは」の歌に「罷らむ」といふ用例のあることである。同じらむでもこれは現在想像とは多少趣が違ふやうに見えるので疑問になる。が、實はこれは現在想像のらむではなく、罷るといふ動詞の將然段即ち第一變化にむといふ想像の助動詞を添へたもので、現在想像のらむではないのである。

(二)「なむ」の誤

「なむ」といふ詞には、三種の別があるから、まづそれから言はう。

(一)のなむ は係のテニヲハのなむで、「花なむさく」「月をなむ見る」などと用ゐられ、テニヲハぞに似てやゝ婉曲に咏嘆の意を含めたものである。これは助動詞のなむに似て非なるものであることを知らねばならぬ。

(二)のなむ は未來完了或は未來想像といつて「散りなむ後ぞ戀しかるべき」など、動詞の第二變化についてなめとも活用するものである。

(三)のなむ は「彼は早く行かなむ」の如く他の動作を希望するもので、誂の助動詞である。以上三つのなむの内、この(三)のなむが一番誤りやすいから、次に少しく説くことにする。この誂のなむが未來完了或は未來想像のなむとちがふ點は、その受ける動詞の段と、活用の有無にある。未來完了或は未來想像のなむは、第二變化から受けて、なめとも活くが、誂のなむは必ず第一變化から受けて、決して活用しない。だから第一變化と第二變化のちがひを心得て置けば、決して誤ることはないのだが、之を誤るために、よく未來想像だか誂だか不明な歌を詠むことがあるのである。

停車場の庭のコスモス眺めつつ久々にかへる夫を待たなむ

などは、普通の希望助動詞むと詠のなむとを誤り用いたもので、正しくいふなら、

停車場の庭のコスモス眺めつつ久々にかへる夫を待たむ

でよい。作者は多分「夫を待たむ」では一音不足するから、なを加へたのであらうが、それでは全然意味が違つてくる。前にもいつたとほり、なが一音入ると自分自身の希望ではなくて、他人に對する希望即ち詠になるから、「久々に歸る夫を待つて下さい」又は「待つてほしい」などの意になる。これは、

小倉山峰の紅葉心あらばいま一度の御幸またなむ

の用例に照してみれば解るであらう。この場合ではこの歌の作者(貞信公)が御幸を待たうといふのではなくて、小倉山の紅葉に「もし心があるなら、いま一度の御幸を待つてほしい」と詠へるのである。だから前の歌も「待たなむ」では意がとほらなくなるのである。

### (3) 「つ」「ぬ」の區別

「つ」と「ぬ」の助動詞は、共に完了態であるが、その語義は各々ちがふ點がある。これは普通文典には詳しくなく、又今では普通文章といはるゝものよりも歌の方に多く用ゐるから、歌を詠む者は心得置くべきである。この二つの詞の語義の差をいふと、

つ は動作的故意的の内容をもつてをり、

ぬ は狀態的自然的内容をもつてゐる。

だから花などが自然に散る状態を「色はにほへど散りぬるを」とはいふが、「ちりつるを」とは言はぬのである。又、反對に自分からわざと世を遁れゆくやうな場合を「思ひわびつひにこの世は捨てつとも云々(狭衣物語)」といへばよいが「捨てぬとも」では語氣が合はぬのである。かつて初心者之歌に、

家づこの心ばかりに糸をもて散りつる花をぬきて歸るも

といふのを見たが、勿論これは「散りぬる花」でなければならぬのである。

### (4) 「なる」の誤

良雄なる益良夫ありて君の仇讎の上野が首はれにけり

この歌の第一句の「なる」はよく誤用せらるゝ詞で、外にも「——なる者あり」「——なる書物は」などと平氣で用ゐられてあるが、元來なるは指定助動詞なりの第四活用で、その意はにあり、にあるなどとなるのである。だから、「良雄なる益良夫云々」といへば、「良雄にある益良夫があつて」といふ譯で、何のことかわからなくなる。作者のつもりでは、多分「良雄といふ」の意だらうから、之を正しくいふなら、

良雄てふ益良夫ありて君の仇醜の上野が首はねにけり  
とせねばならぬのである。

(5) 「居れり」といふ用法はない

紅葉の過ぎにし父が手に植ゑし菊は今年も花咲き居れり  
飼ひおきし犬死ねりて弟は草花そなへ葬りするなり

これはつまり居、死の動詞に、何か助動詞が添うたやうに見える誤で、この種の誤も比較的よくある。元來居、死の動詞の活用は

居 ら り り る れ れ  
死 な に ぬ ぬる ぬれ ね

であつて、居れり、死ねりなどと活らくことは決してない。だから、これらの歌も正しくは

紅葉の過ぎにし父が手に植ゑし菊は今年も花咲きてあり  
飼ひおきし犬死にたれば弟は草花そなへ葬りするなり

とすべきである。

(6) 「まし」の誤

「まし」といふ助動詞は、假定想像の助動詞で、「實際はさうではないが、もし假にさうであつたらなア」といふ意味を現はす詞である。だから、古歌の用例を探してみても、

かれてより君來まさむさ知らませば門に宿にも玉敷かましを (萬葉集)  
うれしきを何に包まむ唐衣たもさゆたかに裁てま言はましを (古今集)

といふ風に、すべて現在の事實に反したことを假定し想像するに用ゐてある。前の歌は「君が突然來られたので、こんなむさくるしい處をお目にかけるが、もしかねてから來られるといふことが解つてゐたら、玉を敷いて美しくして置くのであつたに」といふ意。後の歌は「嬉しさが胸にみちみちて來るが、袂が小さいので包むことが出來ぬ。こんなことなら袂をゆたかに裁てと言ひつけるのだつたよ」といふ意で、共に假定想像であることは言ふまでもない。ところが何時の頃からかこのましに希望の意ありと言ひ出した人が出てきたので、今では希望のむと同じ意に用ゐた誤例が甚だ多い。これは多分、

雪ふりて木ごまに花ぞ咲きにけるいづれを梅さわきて折らまし (古今集)  
秋の野に道もまどひぬ松蟲の聲する方に宿や借らまし (古今集)

などによつて、むと同じ用をなすものと心得てゐるのであらうが、これとても「折つたものだらう



か「借りてもみようか」の意で、假定の心を十分含んでゐるのである。然るに、  
 秋の夜のさやけき月をしるべにて多峰<sup>たをのすやま</sup>主山に友を訪はまし  
 などと、單に希望の意に用ゐたのは、誤つた用方<sup>もちひかた</sup>と言はねばならぬ。これはよろしく、  
 秋の夜のさやけき月をしるべにて多峰<sup>たをのすやま</sup>主山に友をたづねむ  
 とでもすべきである。

(7) 「まし」と「まじ」の混同

前に言つたことは、「まし」だけの誤であるが、よく初心者の中には、「まし」と「まじ」とを混同して心得てゐる人がある。が、まじは前述のとほり假定想像、まじは打消で、口語では「まい」に當るのだから、區別して心得置かねばならぬ。またまじの活用は、  
 まじく まじく まじ まじき まじけれ  
 であるから、之も併せて心得置くがよい。

(8) 「し」「たる」の誤

口語に於ては「し」も「たる」も共にたで、「見し」も「見たる」も「見た」といふ詞で現はす。けれども文語に於てはしとたるとは判然たる區別があつて、しは過去、たるは現在の完了である。ところがこの過去のしと現在のたるとを混同して用ゐた例が近來非常に多い。

五月雨の庭の面見れば葉がくりに濡れし梅の實ゆれつつ光る

などがその適例であつて、現在濡れてゐるものを、しと過去にいふのは誤である。これは、

五月雨の庭の面見れば葉がくりに濡れたる梅の實ゆれつつ光る

として、はじめて正しい語法となる。この二つの詞は、最も誤りやすく、而して最も明かな誤であるから、よく心せねばならぬのである。左にこの詞の活用を示さう。

過去 ○ ○ き し しか

現在 (完了) たら たり たり たる たれ

四、て に を は

(一) 「だに」「すら」「さへ」の別

「だに」「も」「すら」「も」「さへ」「も」、口語ではみなひとしくさへの一語で間に合せる。その習慣がついてゐるので歌を詠むに當つても、之を完全に使ひ分ける人は少ない。然るにこの三つの詞は、各々作歌上非常に重要な詞で、かなり複雑な主観もこれらの詞の扱ひやうひとつで現はすことが出来るのである。従つてこれらの詞の意義用法を心得て置かぬと、非常に不自由であるから、茲には少し詳しく説明しよう。

(一)だに。は口語に「せめてこれだけでも」といふ意を現はし、他の大きい何ものかを言外に残して、あらはにいふよりも一層強い響をもつた詞である。この詞は古今集に、

命だに。心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし

を心得て置いて、他は類推するが一番便利である。この歌の意は「せめて命だけでも思ふまゝになるものなら、何もわかれとても悲しいものではない」といふので、言外に「ところが命には限りがあるので、再會することが出来るかどうか解らぬから、それで別が悲しいのだ」といふ心を匂はしてある。だからもしこの詞を活かして使ひ得るやうなら、一寸説明しかねるやうな複雑な心も、説明する以上に表現することが出来ようといふものである。

(二)すら。は口語の「でさへやつぱり」、漢語の「尙且」などの意で、時には前のだにと共通することがある。併しこの詞の特に有つ意義は、だにとは多少違ひ、「君病氣と聞けば我すら悲し」といへば、「我でさへやつぱり悲しいものを」の意で「當の病人は一層悲しからう」との意を、言外に現はしたものである。

(三)さへ。はちよつと口語にあてはまる詞がないが、あるが上にも添へ合する意の詞で、萬葉集に

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜おけどいや常磐の木

とあるのが、その好例である。この歌の意は「橘といふ木は、木はさらなり實まで、實はさらなり花まで、花はさらなり葉まで常磐の木である」といふのであつて、まづかやうに用ゐるものだと思へばよろしい。

以上でだに・すら・さへの意義は大方解つたらう、この内だに・すらの二つは場合によつては互に通はせて用ゐてもよい。が、この二つの詞とさへと甚だ異なるを忘れてはならぬ。

### (2) 「に」「へ」の別

「に」は「位」の義で、こなたより及ぼす動作の至る位置を示す詞、「へ」は「方」の義で、その方角を示す詞である。だから本來使ひ分けねばならぬのであるが、口語では兩方混同して用ゐるので、文語でも混へ誤る場合が多い。たとへば

吾妹子へ辨當あづけて我と兄尾花さるべく山にいそぐも

などがその好例で、こゝでは本來位置を示すべき「吾妹子」に對して方角を示すへが用ゐられ、方角を示すべき「山」に對して位置を示すにが用ゐられてある。これでは文法どほりに解釋すると、何のことかわからなくなるから、

吾妹子に辨當あづけて我と兄尾花さるべく山へいそぐも

とせねばならぬのである。

(3) 「が」は卑俗である

昔草は緑さばかり思ひしが今年は赤き花さきにけり。

ここよりは故郷なるが栗山の栗もきられて家たちにつけり

こゝに挙げた「が」、「なるが」などの詞は、口語ののになどに當り、現今の文章にはよく用ゐられるが、歌に用ゐてはあまり賞すべき詞ではない。勿論口語系の詞だから用ゐてはならぬといふ理由はないが、これらの詞はよほど巧に用ゐられ、且利いてゐないと意が俗になつて、歌品が一段落ちる。殊にこの二首の場合などは、

昔草は緑さばかり思ひしに今年は赤き花さきにけり

ここよりは故郷なれど栗山の栗もきられて家たちにつけり

で意もとほり、一向趣も變らないのだから、なるべくかやうな俗語を避けた方がよいのである。

(4) 「ゆ」の誤

近頃は萬葉集の多く讀まれるところから、歌を詠む者の間に古語が復活した。そして色々此の集

中の詞が用ゐられるが、中でも發點もしくは比較、所由、依託を表はす「てにをは」よりの古格ゆなどは盛んに用ゐられる。ところが中にはゆといふ音だけを聞き覚えて、その意義を知らぬ人がある

と見え、よく位置を示す「てにをは」にの代りに用ゐた例を見る。

妹が家の庭ゆ咲きたる梅の花月の夜すがら見れどあかねかも

などがそれであるが、それでは「庭より咲きたる」になり、何のことか一向わからない。よろしくこれはにに改むべきだが、この問題は何もこの詞にのみ限らぬ。生なか聞きかじりの詞を用ゐることは、往々このやうな誤に陥るから、初心者によく注意せねばならぬのである。

五、係 結

文中の或る部分に、或る詞が有ると無いとによつて、結末に用ゐる動詞、形容詞、助動詞の活用に區別がある。これを係結といふのだが、初心者はどうもこれを誤りやすい。

この係結の法則は三つある。即ち、

- (一) 尋常の結
- (二) ぞ、なむ、や、かの係辭ある場合の結
- (三) こそその係辭ある場合の結

二〇六  
がそれだ。この内(一)の尋常の結といふのは以上五つの係辭のない場合の結で、これは時として第四活用を用ゐるのみで、大抵は第三活用を用ゐ、常に多く使はれるところから誤は尠ない。よつてここには(一)(二)(三)の係辭ある場合の結だけを説明しよう。

(一)「ぞ」「なむ」「や」「か」の結

文中上に、こゝに擧げた四つの係辭がある場合は、その結末を動詞、形容詞、助動詞の第四活用で結ぶ規定である。例を擧げると動詞では、

花<sup>ぞ</sup>なむ……落つる。 誰か……知る。

となり、形容詞では、

花<sup>ぞ</sup>なむ……美しき。 誰か……賢き。

となり、助動詞では、

花<sup>ぞ</sup>なむ……咲きたる。 誰か……知るべき。

となる。誤つて、

夜もすがら峯越の風は吹きやます庭の櫻の花や散るらめ  
などと、やの係辭に對して第五活用で結んだのがあるが、これは、  
夜もすがら峯越の風は吹きやます庭の櫻の花や散るらむ  
としなければならぬのである。

因にいふ。なむは主として散文に用ゐ、歌にはほとんど用ゐないから、之も心得て置く必要がある。

(二)「こそ」の結

又上に「こそ」の係辭ある場合には動詞、形容詞、助動詞の第五活用を以て結ぶのが規定である。例を擧げると動詞では、

花こそ落つれ。

となり、形容詞では、

花こそ美しけれ。

となり、助動詞では、

花こそ咲きたれ

となる。誤つて、

わが家の梅の花こそ咲きにけりたづれて來ませ清き月夜に  
などと用ゐたのがあるが、勿論これは、

わが家の梅の花こそ咲きにけりたづれて來ませ清き月夜に  
でなくてはならぬのである。

### 六、其他誤り易い例

#### (1) 「な」(禁止の詞)の誤

禁止のなは學者によつて副詞とし、また助動詞とするから、特に別にして置く。このなの用法は、この詞が文句の下にある時は、動詞、助動詞の第三活用(良行變格のみは第四活用)を承けるのであるが、よく誤つて、

君よ君野菊の花を忘るるな君さつみにし野菊の花を

などと用ゐた例をよく見る。けれども忘は良行下二段活用で、るは第四活用だから、これはどうしても第三活用を承けて、忘るなでなければならぬ。

#### (2) 「な そ」の誤

又、この禁止の詞にはなの格といふものがある。な、その二つの詞の間に、動詞の第二活用

(加行佐行變格は第一活用)を挟んで

なの燒きその 來その 爲その

などとし、強く婉曲に禁止の意を現はすのであるが、これもよく誤つて、

わが山に雲なたなびきそ白妙の水木の花はいまさかりなり

などとなを略して用ゐた例が澤山ある、多分これはそこに禁止の意があるものと心得てなを略したものであらうが、それは指示のぞと同じで、禁止の意はなの方にあるのだから、之を略することは出来ない。むしろ古くはそのない用法があるのだから、

わが山に雲なたなびきそ白妙の水木の花はいまさかりなり

と、それを略した方がよいのである。

#### (3) 「つつ」の誤

「つつ」は完了の助動詞つの重用で、重複、繼續、兼他の意があり、動詞の第二活用につく「てにをは」

である。(但し學者により接尾語とす) だから重複、繼續、兼他の意を現はすには、つを重ね用ゐねばならぬのであるが、

久々に來たる友なればうれしくて飯をたうべつはなしをするも

などと、一つを略したのがよくある。けれどもこのつは一つのみでは完了の助動詞であつて、「てにをは」のつとは大分意味が違ふことになるから、省略することは出來ない。勿論この歌にしても、作者のつもりでは「たべつはなしつ」の意を現はしたものでらしく、それなら兼他に相當するのだから、つでなければ詞を成さないのである。尤もそれでは一音多くなるので略したならば、

久々に來たる友なればうれしくて飯をたべつつはなしをするも

と、「たうべ」のうを取つた方がよい。

大正十五年 九月 一日 印刷		(定價八拾錢)
大正十五年 九月 六日 發行		
著者 金子 薫園		
發行者 佐藤 義亮		
發行所 東京市牛込區矢來町三番地 新潮社		
電話牛込 八八八八 〇〇〇〇 九八七六 番番番番		
番二四七一(京東)替振		
印刷所	東京市麴町區飯田 町二丁目五十番地	
印刷者	猪木 卓二	
京華社		
<歩一第の歌作>		

□書叢門入藝文□

第二編 ■ 世界文學の輪郭 木村 毅氏著

名作の拔萃、文人逸話の収録にも細心の注意を拂ひ、殊に、新興プロレタリアの評論家が、過去の文藝史に加へた新批判の如きも遺漏なく收め、従来の無味乾燥にして記憶に不便な配列を全然廢し、著者が讀書的經驗から割出した新創意の記述法を用ゐた。文藝研究者の必讀すべき名著。

第三編 ■ 明治大文學の輪郭 加藤武雄氏著

坪内逍遙より菊池寛までに至る文壇推移の跡を樞軸となし、明治初期文藝の詳細なる考察に始まり、プロレタリア文學勃興の的確なる論考に終る。更に附録としては根本となるべき研究資料を收め、眇たる掌中の小冊の裡に現代文學の精髓を盛つて遺憾なからしめた大名著である。

第四編 ■ 作詩の新研究 川路柳虹氏著

本書は、詩の根本義を説き、詩的精神の本質を明かにして、一面高級なる詩學講座たると共に、作詩の方法に就て、現代詩人の諸作を例として、周到深切の説明を加へたるもの。現詩壇に、詩人としても詩論家としても其一流に居る作者が、二百餘頁の中にその全蘊著を傾け盡せる名著。

▷ づ錢六各料送・錢拾八冊一・裝紙判六四新

□書叢門入藝文□

第四編 ■ 作劇の理論と實際 能嶋武文氏著

戯曲の本質、戯曲の構成等より、いかにして戯曲を作る可きかの技巧の細部に至る迄、劇作家なる著者が、自己の體驗を基礎とし、現代各作家の作品を例證に擧げ、周到、明快、手を取て教へる様に説いたもの、此一冊を十分に讀みこなせば、劇作家としての用意は完成するであらう。

第五編 ■ 簡易日本國劇史 濱村米藏氏著

一貫した、統一ある日本最初の國劇史は、始めて公にされた。第一部を「古典劇時代」として、原始時代より能樂を経て、操淨瑠璃と元祿歌舞伎に及び、國劇生長の經路を明かにし、第二部は「近世劇時代」として、元祿より寛政迄の百年間を、更に文化文政より明治初年までを説いたもの。

第十編 ■ 作歌の第一歩 金子薫園氏著

歌はむづかしいものでない、唯にでも出来るものである。たゞ入門期に於いて其の往くべき道を誤まらなければ、自から進歩發達すべきものである。本書は部門を四つに分つ、「歌の眞意義」「推敲の方法」「讀むべき歌集」「誤りやすい歌の誤法」等、入門者の往くべき作歌の大道を詳説す。

▷ づ錢六各料送・錢拾八冊一・裝紙判六四新

金子薰園氏 若山牧水氏共選

最新代表歌選

第七十版

總淨布製美本  
定價七十錢  
郵送料六錢

歌を學ぶ人の爲めに始めて理想的模範歌集出たり

歌を學ぼうとする初學の士の爲めに薰園氏は既に作法や辭典を公にされてあるが、それと共に一大模範歌集の必要を認め、牧水氏と相計りこの一卷を編まれた。選擇は極めて嚴正。諸君が師として學ぶに最も適するものであることは云ふ迄もない。

本書は現代諸名家が幾十卷の歌集の結晶せるもの也

本書は金子、啄木、薰園、牧水、夕暮、哀果、空穂、榮舟、信綱の諸氏をはじめ新進歌人関秀諸家の集數十卷に就いて其作家の特色を發揮せるものを採り、以て一卷としたものであるから、此の書一部を讀むことは、歌壇名流の集數十卷を讀破したと同じである。

本書の分類は斯くの如くに精細。用意の周到を見よ。

本書は歌の類別に非常な注意を拂ひ一つく特色的題目を附けてある。同じ「空」と云つても、空—大空—青空—春の青空—冬の青空—雪後の青空—春夏の往きかふ空—夏の空—などのやうに細かく分けてある。から諸君の求むる歌は、容易に得られる。

現代自選歌集

(1) 與謝野晶子集 (第廿四版)	(2) 金子薰園集 (第十八版)	(3) 若山牧水集 (第十版)	(4) 吉井勇集 (第十二版)	(5) 土岐哀果集 (第四版)	(6) 前田夕暮集 (第四版)
羽二重表紙 特製極美本	何れも其の處 女歌集より最 近の集に且り 一千數百首を 抜きて一卷と なせるもの、 諸家の自信あ る傑作全集也	定價四圓貳角 郵送料六錢	定價四圓貳角 郵送料六錢	定價四圓貳角 郵送料六錢	定價四圓貳角 郵送料六錢



金子薰園氏誕辰五十年記念出版

# 金子薰園全集

四六版特製  
五百二十頁  
定價貳圓五拾錢  
郵送料拾貳錢

## 内 容

最近二年(大正二一—一四)	覺めたる歌(明治四三・三發行)
濃藍の空(同 一二・二發行)	わがおもひ(同 四〇・三發行)
静まれる樹(同 九・三發行)	人(同 三九・四發行)
星の空(同 六・三發行)	小詩(同 三七・三發行)
草の上(同 三・二發行)	片われ月(同 三四・一發行)
山河(明治四一・二發行)	◇著者 年 譜

歌壇の耆宿金子薰園氏が昨年誕辰五十年祝賀の日を迎へたるを記念すべく、その代表全作三千五百首を集めて本全集を刊した。所謂新派和歌の發生と共に歩みをおこし、爾來三十有餘年、専念に此の一筋に精進し來れる氏の業績は、此の一卷に結晶して、燦爛たる光輝は、長くわが明治大正の短歌史上に耀くであらう。歴史的  
大歌集として、斯道の士は必ず一本を座右に備ふべきである。



544  
132

終

